



2013年11月 第11巻第11号

かく語りき—聖人の言葉

愛を通じて、人は放棄と識別を自然に習得する」

(シュリー・ラーマクリシュナ)

「ハートの中に師の御足を思い浮かべよ。師を常に思うことによって、幻惑の大海を渡るのだ」

(グル・ナナク)

今月の目次

- ・ かく語りき—聖人の言葉
- ・ 2013年12月の予定
- ・ 2013年8月の逗子例会 シュリー・クリシュナ生誕祝賀会 午後の部
「クリシュナの物語と、そこに込められた意味・メッセージ」
スワーミー・メーダサーナンダの講話
- ・ 忘れられない物語
- ・ 今月の思想

今月の予定

・ 生誕日 ・

スワーミー・プレマーナンダ

12月11日(水)

ホーリー・マザー シュリー・サーラ

ダー・デーヴィー 12月24日(火)

クリスマス・イブ 12月24日(火)

スワーミー・シヴァーナンダ

12月28日(土)

・ 行事 ・

12月7日(土) 14:00~16:00

東京例会

講義：バガヴァッド・ギーター (無料)

場所：インド大使館 : 03-3262-2391

お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

12月1日(日)、8日(日)、15日(日)

14:00~15:30

ハタ・ヨーガ・クラス

場所：新館アネックス

*体験レッスンもできます。

お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

12月14日(土) 17:00~

シヴァーナンダ・ヨーガ東京センター

講話

詳細：<http://www.sivananda.jp/>

12月15日（日） 10:30～16:30

逗子例会

場所：協会本館

講話テーマ：宗教は悟り（Religion is Realization）

朗誦・輪読・講話・賛歌など

12月24日（火） 19:00～21:00

クリスマス礼拝

場所：逗子協会本館

プログラム

17:30 夕拝

19:00 礼拝、聖書朗読、キャロル、瞑想

19:40 講話

20:40 夕食（プラサード）

*12月のホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動はお休みです。

2013年8月の逗子例会 シュリー・クリシュナ生誕祝賀会 午後の部

「クリシュナの物語と、そこに込められた意味・メッセージ」

スワミー・メーダサーナンダの講話

皆さんご存知の通り、誰もがマハーマーヤのワナにかかります。正しい考えを持って正しい行いができず、無知の闇に陥り問題に巻き込まれます。また、執着し、束縛されます。

午前の部でお話ししましたが（注：10月号参照）、劇作家・脚本家で俳優のギリシュ・チャンドラ・ゴージュという人がいました。ギリシュはアルコール中毒で自由奔放に生きていましたが、シュリー・ラーマクリシュナに影響を受け、真の聖者へと変わりました。そのギリシュが、マハーマーヤもスワミー・ヴィヴェーカーナンダを縛ることはできなかったと言いました。というのも、マハーマーヤが縛りつけようとする度に、スワミーの体が大きくなって、縄が足りなくなったのです。スワミーは遂に無限になってしまい、縛られることはありませんでした。これは、ヤショーダーがクリシュナを縛れなかった話と似ています。クリシュナの本性が無限だったからです。



クリシュナとブラフマー

クリシュナの育った地域では酪農が盛んで、牛の放牧や乳製品作りを生業にしている人がたくさんいました。このため、クリシュナの幼少期の友達には牛飼いが多く、クリシュナはこうし

た友達と同じことをして毎日を過ごしていました。毎朝、乳搾りが済むと、男の子たちは牛を放牧して草を食べさせ、その間皆で一緒に歌ったり踊ったり遊んだりしました。夕方になると牛を集めて畜舎に連れ戻しました。クリシュナも友達の男の子たちも毎日の日課に何ら違いはありませんでした。

ヒンドゥー教の宇宙論では、創造を司る神はブラフマー、この宇宙の維持を司る神はヴィシュヌ、宇宙の破壊を司る神はシヴァで、これらの神の中でもヴィシュヌは特別な地位にあります。ブラフマーは、シュリー・クリシュナがヴィシュヌの化身であることをもちろん知っていましたし、子供のクリシュナがヴリンダーヴァンでどんな状況・環境にあるかも分かっていました。しかし、ブラフマーは自分の目でクリシュナの様子を確かめたくなり、牧童たちと遊んでいる様子を観察しました。クリシュナには神性のかけらも見当たらず、何の変哲もないただの村の子供に見えました。ブラフマーは困惑しました。「この子が本当に神の化身なのだろうか。私には、友達とふざけ合って遊んでいる普通の少年にしか見えない」

クリシュナは、自分の両親に対してさえ本性を隠していることがよくありました。そうでないと、「息子は本当に神様の化身なのだろうか」と親を悩

ますことになるからです。ヤショーダーはよくそうやって悩みました。一瞬神の姿を見て、訳が分からなくなるのです。

ブラフマーはクリシュナを試してみたくなりました。どうしたかという、放牧中、男の子たちが遊んでいる間に、牛を洞穴の中に連れて行き眠らせてしまったのです。子供たちは、気がつくと牛の姿が見えなくなっていて大変心配になりました。クリシュナは皆に、自分が探しに行くからここで待っていてと言ひ、牛を探しに行きました。しかし、あちこち探しても牛は見つからず、クリシュナは仕方なく友達のところに戻りました。するとどうでしょう、少年たちもいなくなっていました。ブラフマーが子供たちも洞穴の中に連れて行って眠らせたのです。一体何が起きたのか、クリシュナには全く理解できませんでした。そこで、その場で瞑想を始めると、神のひらめきによりブラフマーのいたずらだとすぐに分かりました。

そこで、クリシュナはブラフマーを懲らしめてやることにしました。夕方になると、クリシュナは自分の体から、いなくなったのと同じ牛や友達を作り出しました。そしていつもの通り、友達と一緒に牛を集めて家に帰りました。これまでとの違いはただ一つ、友達の親たちが我が子らに突然特別な愛情を

感じるようになったことでした。親自身にも、なぜこんなにも強い愛を感じるのか説明のしようがありませんでした。

こうして一年が過ぎました。ブラフマーが様子を見に戻ってくると、自分が洞穴に隠したのと同じ男の子たちが、同じ牛の世話をし、前と同じように遊んでいるではありませんか。ブラフマーは訳が分からなくなって洞穴に行ってみると、子供たちも牛たちも一年前と同じくそこで眠っていました。ブラフマーは、クリシュナの仕業だ、見かけは普通の子供でもクリシュナはやはり神なのだとすぐに気付きました。クリシュナはブラフマーに対し、この宇宙に自分でないものはない、自分はあらゆるものの中にいるのだ、と言いました。この言葉を聞いたブラフマーは許しを乞い祈りの言葉を捧げ、クリシュナの本当の姿を認めなかったことを謝りました。親たちが我が子に特別な愛を感じたのもこれが原因です。子供たちはマーヤーの力で子供になっていたわけではなく、クリシュナの表れそのものだったのです。

クリシュナと賢者

クリシュナの生涯については、成長、学問、霊性や音楽、武道の訓練などにまつわる物語がたくさんあります。クリシュナは、戦士となって悪王カンサ

を殺しました。また、牢屋に入れられた両親を救い出してマトゥラーの王になり、結婚して普通の家住者の生活も送りました。クリシュナが家住者としてどうやってうまくやっているのかと興味を持った、有名な賢者がいました。賢者は宮殿に行って、よかったら一緒に昼食を取らせていただきたい、様々な方法でクリシュナの奉仕を受けたいと願い出ました。クリシュナは、客人に奉仕するのは家住者である自分の務めであり、尊敬する聖者に奉仕するのであればなおさらのことだ、と承諾しました。

すると賢者は、自分がお腹いっぱいになるまではクリシュナもクリシュナの妻も食事を取ってはいけないと指示しました。クリシュナの妻である女王は、たくさん料理をこしらえ賢者に食事を出し始めました。続いて、賢者はクリシュナと妻に、自分の食事中、扇いで風を送るように指示しました。そして突然、馬車で出かけるよう二人に命じました。但し、馬ではなく二人が馬車を引くようにと言ったのです。クリシュナは、それで喜んでいただけると快諾し、馬車を引き始めました。このような作業にはもちろん慣れていませんから、何度も転んだりつまずいたりしました。王と女王のこうした様子を見ていた臣下たちは、賢者に反感を持ち、しかめ面で批判を始めました。「こんなことをさせるとは、何という

賢者だ」

突然、賢者は「おやめください」と叫ぶと、クリシュナの足下にひれ伏しました。「主よ、どうぞお許してください。あなた様が家主者として、その務めを完璧に果たされているかどうか試したのです」こうして、家主者としての真価を問う賢者の試練にクリシュナは合格したのです。

また、クリシュナが有名な賢者の師の下で聖典を学んでいたとき、スダマという友人がいました。スダマはブラーミンで、とても親切でよい人でしたが大変貧乏でした。彼の妻は貧しいことが不満で、お金がないのにどうやって家庭を切り盛りすればいいのかと文句を言ってばかりいました。一方、夫の友人であるクリシュナは王様で裕福だったので、夫に、クリシュナの所に行ってお金を恵んでもらってきて、としつこくせがみました。スダマはなかなか言う通りにしませんでした。遂に折れて、クリシュナに会いに行くことにしました。が、お金を無心する約束しませんでした。スダマは、妻の言う通りにすれば妻に感謝されるし、同時に愛する友人にも会うことができるので一石二鳥だと考えたのです。会いに行く以上、手ぶらで行くわけにはいきません。しかし、貧しい二人には、王様にふさわしい贈り物など何もありません。

妻はスダマの服の端にふくらし米を結びつけてやりました。スダマは少なくともこれで贈り物になるので、ひとまず満足でした。スダマは宮殿へと向かいました。旧友が訪ねてきたと聞き、クリシュナは急いで出迎え、スダマを抱き寄せました。そして自分の部屋のある上層階へスダマを案内し、クッションにスダマを座らせると、様々にもてなしました。思い出話を語り始めたとき、ふとクリシュナが尋ねました。「友よ、久々に再会する私に、何か持ってきてくれたらどうか」

壮麗豪華な宮殿の真ん中で、クリシュナの妻ルクミニが扇で送る風を受けながら、スダマはふくらし米を見せるのが大変恥ずかしくなりました。クリシュナがスダマの持ち物を調べ始めると、服の端に何か結びつけられているのに気付きました。奥さんは土産に何か持たせてくれなかったのかと尋ねるクリシュナの目に、ふくらし米が見えました。クリシュナは大変喜び、手のひらに一度すくって食べました。もう一度すくおうとすると、ルクミニが言いました。「一杯で充分です」

そこでクリシュナはスダマに、他に何か理由があって会いに来たのではないかと尋ねました。しかしスダマは、妻に言われて金の無心に来たことは言うまいと決めていました。しばらくの後、

スダマはクリシュナにいとまを告げて、家に帰りました。家の前の通りまで来ると、自分のあばら家がたっていた所に豪邸があるではありませんか。そして、宝石と高価なサリーに身を包んだ妻が走って出迎えに来ました。ルクミニがクリシュナに、スダマが妻に持たされたふくらし米を取りすぎないようにと注意した意味はこれだったのです。どんなものを主に捧げようと、主は数千倍にして返していただきます。物質的には取る足りないささやかな物でも、愛と信仰を持って捧げれば、主は千倍にして返してくださるのです。

牛を死なせよう

クリシュナは、様々な物語の中で様々な役柄になっています。ある物語で、クリシュナはアルジュナと一緒に乞食（こつじき）をしようと誘いました。アルジュナは同意し、二人は物乞いの格好をして食べ物を乞いに出ました。初めに立ち寄った所は、大変貧しいながらも神への深い信仰心を持つブラーミンの家でした。この男には妻も家族もありませんでしたが、一頭の牝牛がおり、男はこの牝牛に強い愛着がありました。家にやってきた二人に、男は、あげられるものがミルクしかないことを詫言いました。クリシュナは、ブラーミンが差し出したミルクを大変喜んで受け取り、二人は満足してその場を去りました。道すがら、クリシュナは「あ

の牛を死なせてしまおう」と言いました。この言葉にアルジュナは大変驚きました。牛は貧しいブラーミンの唯一の財産だったのです。しかし、アルジュナは何も言いませんでした。次に、二人は裕福な男の豪邸が建つ土地に近づいていきました。クリシュナは門番に、この家の主人に会いたいと頼みましたが、断られました。何度もお願いをして、やっと中に入れてもらえました。

乞食が二人近づいてくるのを見て、家の主人は誰が中に入れたのだと厳しい口調で言い、施すものなど何もないから出て行けと命じました。クリシュナはこの言葉に従い、二人は家を去りました。道すがら、今度はクリシュナはこう言ったのです。「あの男をもっと豊かにしてやろう！」

アルジュナはますます困惑しました。「主よ、これは一体どういうことですか。あの貧しいブラーミンには牛一頭しかいないのに、あなた様は牛を殺せとおっしゃる。金持ちの男は有り余るほどの財産を持っているというのに、あなた様はもっと与えてやろうとおっしゃる。しかも、あの金持ちは施しを拒んで私たちを追い出したのですよ」

アルジュナには、主は何をするときにも何か考えがあると分かっていたので、その理由を尋ねました。クリシュナは

答えました。「いいかい、あのブラーミンは私の熱烈な信者だが、私の悟りを得るのに一つだけ障害があるのだ。あの牛だ。牛を死なせようと言ったのは、そうすれば悟りへの障害が取り除けるからだ。牛を持っている喜びに比べれば、神の悟りを得ることはどれほど大きな恵みであろうか。また、あの金持ちはすでに私のことなど頭になく、私のことを考えることなど全くない。それで満足なら、私のことなどもっと忘れてしまえばいいのだ」

このように、主のやり方を理解するのは大変難しいものです。他の人たちは楽しい人生を送っているのに、祈りや霊的修行を続けご奉仕をする信者にはいつも問題が耐えません。主がどのような方法で私たちを浄め霊的にしてくださるのかは、主にしか分からないのです。神様のやり方は大変変わっています。「牛を死なせよう」私たちは、このようなことを容易に受け入れられるでしょうか。理解するのはとても難しいのですが、もし神様を大変強く信じていれば、神様から与えられるものは全て私たちのためになることなのだと分かります。強力な信仰があって初めて、このような試練を乗り越えられるのです。さもなければ、試練に屈するしかありません。

神様とその名前

次に、神様とその名前についてですが、少し前に逗子例会で「神様の名前の力」をテーマに講話を行いました。神様の名前が持つ力についてももう一つお話ししましょう。クリシュナの妻はクリシュナの誕生日に、クリシュナの体重と同じ重さの金（きん）をブラーミン全員に寄付したいと思いました。クリシュナは王様だったので与えるのに十分な金を持っており、妻の計画に同意しました。クリシュナが天秤の片皿に座ると、妻や家臣らがもう片方の皿に金の延べ棒を載せ始めました。しかし、いくら金を載せても天秤は少しも動きません。

一部始終を見ていたある賢い信者がクリシュナの妻に尋ねました。「女王様、何をなさっているのですか。金などで宇宙の主の重さを量ることなどが本当にできるのでしょうか。金をどけて、代わりにクリシュナ様のお名前を白檀の練り粉でトゥルシの葉に書き、天秤皿に載せてごらんください」とすると、天秤はすぐに釣り合いました。これは、主の御名と主御自身は一つであり同じであることを示しています。

また、ゴピーらのシュリー・クリシュナへの愛とクリシュナのゴピーらへの愛についての話もたくさんあります。信者らは皆クリシュナを愛しているのに、ゴピーらの愛情ばかりがなぜもてはやされるのかと快く思っていない人

たちがおり、嫉妬している人たちもいました。クリシュナはそのような人たちに、気持ちは分かると言っていました。しばらくして、クリシュナが高熱に倒れました。容体は悪化して合併症が起こり、クリシュナは命が危ぶまれる状態になりました。たくさんの医者に診てもらいましたが、治療法は見つかりませんでした。遂に、クリシュナは、自分が治療法を知っていることを告げました。「私の信者の足の塵を私の額に載せれば、病気は治るだろう」誰もが主の御足の塵を欲しがりますが、自分の足の塵を主に捧げる信者などいるのでしょうか。そんなことを考えるだけでも罪だとされています。実行に移したらその者は間違いなく地獄に落ちるでしょう。しかし、これがゴピーらに伝わると、自分の身に降りかかることを顧みることもなく、全員が自分の足の塵を喜んで捧げました。「これでクリシュナ様が元気になれるのなら、私たちがどうなろうと構いません」これは、信者が自分の幸福よりも、愛する主の幸福を願っている姿のよい例です。

信者には三種類あります。まず、主にたくさんの祈りを捧げて願いが叶うことを望みますが、主の幸福は一切頭になく自分の幸福だけを考える信者。次に、もう少し次元の高い信者で、「私も神様も幸せになりますように」と考える信者。こういう信者は、少しだけご

奉仕をし、少しだけお金や供物を捧げます。そして最高の信者は、自分のことなど一切顧みず「神様が幸せになりますように」とだけ考え、神様のためになることをひたすら行うのです。

『ラーマクリシュナの福音』に、三人の友達が森に入っていく話があります。三人は、突然トラの鳴き声を聞きます。一人は、祈りの力の大きさを知らず、きつと食い殺されてしまうと考えます。もう一人は、「ここで死んだりするものか。神様にみんなで祈ろう。そうすればきつと助けに来てくださる」と言います。三人目はこう言います。「こんなことで神様を煩わせるのはよくない。木に登ろう」これが神様への愛です。祈れば神様が助けに来てくださることが分かっているにもかかわらず、そんなことで神様に迷惑を掛けたくないのです。私たちも、神様を煩わせず、木に登りましょう。ゴピーたちについても同じことが言えます。自分がどうなろうと、クリシュナに仕えることだけを望んでいたのです。最高の信者は神様にお仕えすることだけを考え、自分のことは考えません。

エゴのないクリシュナ

パーンダヴァー族がクルクシェートラの戦いでカウラヴァー族に勝利した後、ユディシュティラは王になりました。即位の際に大きな犠牲祭を開き、

近隣の王国から招いた多数の王族とお付きの人々のために様々な準備が施されました。この日クリシュナは、靴磨きの仕事を買って出たのです。これは、神様にエゴのないことの表れです。シュリー・ラーマクリシュナは、ブラーミンで神様の化身であったのに、自分が掃除夫より優れているという感情を消すために、こっそりと掃除夫の家に行き自分の髪でトイレの掃除をしました。

このようなことは、聖典を読んだり講話で聞いたりするだけではなく、実践が必要です。協会でも、信者の方が来てトイレの掃除をやってくださいますが、本当にありがたいと思います。台所のお手伝いや掃除機がけなどをやりたがる人の方が多く、もちろんそれも助かりますが、トイレの掃除が十分でないことがあります。そんなとき、誰かが自分からトイレを掃除してくれるのです。働きとはご奉仕であり、ご奉仕とは礼拝であるという崇高な考えです。素晴らしいことに、このような考え方は日本で非常によく見られます。これが、エゴがないということで、主に仕えることなのです。

ドラウパディーは、パーンダヴァ五兄弟の共通の妻で、大変美しく朗らかで、非常に霊性がありました。ドラウパディーは神様から二つの恵みを授かっていました。一つは、食事の用意をしよ

うとすると、野菜を切って水を足すだけで料理が自然にできてしまうのです。もう一つは、できた料理を自分が食べなければ、いくら客人が来て食事を出そうとも、鍋の中から決して料理がなくなることはありませんでした。

カウラヴァー族のいとこたちはパーンダヴァ兄弟を大変ねたんでいました。特に長兄のドゥルヨーダナはとても邪悪な心を持っていました。ある日、ドゥルヴァーサという名の大変短気な聖者がドゥルヨーダナの宮殿にやって来ました。ドゥルヴァーサの前では、誰もが彼を怒らせないように注意していました。ドゥルヴァーサはドゥルヨーダナに歓待されて食事を振る舞われ、大変満足しました。そして、お礼として自分の力で何でもかなえてやるから、欲しいものがあれば言うようにと告げました。ドラウパディーの力を知っていたドゥルヨーダナは、卑劣にもこう答えました。「ドゥルヴァーサ様、パーンダヴァ兄弟が近くの森に住んでおります。どうぞ訪ねて行って、もてなしを受けてきてください。但し、午後二時以降にご到着なさいますように」

もちろん、午後二時には昼食は終わっていますから、追放され森で暮らしているパーンダヴァ兄弟は、聖者をもてなす食べ物もなく大変な窮地に陥るはずです。ドゥルヨーダナは、ドゥルヴァーサが腹を立てて兄弟に呪いをかけ

るか、さらには兄弟を殺してしまうだろうと計算したのです。

聖者は単純でこのような策略に気付きもせず、弟子を連れてパーンダヴァ兄弟が身を隠す森へと向かいました。兄弟に会うと、食事の前にまず沐浴をしてくると言って川に行きました。アクシャヤ・パトラを授けられたおかげでパーンダヴァ兄弟らは食べ物を得ていたのです。聖者に出す料理に使う食材を集めてくる時間も、料理をする時間もなく、ドラウパディーは大変困りました。鍋の中にはもう食べ物がありません。このままではドゥルヴァーサの怒りでパーンダヴァ兄弟らは破滅してしまいます。ドラウパディーは、クリシュナに心の底から助けを求めました。信者が困ったときはいつでも助けに来てくれると知っていたからです。「お願いです、助けに来てください。本当に困っているのです。このような一大事に私たちを救えるのはあなた様だけです」

すると突然クリシュナが現れてこう言いました。「ああお腹が空いた。何か食べるものはないかい」

「いいえ、何もありません。主よ、だからあなた様をお呼びしたのです」

「鍋の中をよく見てごらん。何でもいから残っている物を出してくれ」

クリシュナの言葉を聞き、ドラウパディーは米の鍋をのぞき込むと、中には米粒が一、二粒残っていました。別の鍋にはほうれん草がわずかに残っていました。クリシュナは、それでいいから持ってくるように言い、運ばれてきた米粒とほうれん草を食べると大量の水を飲みました。そして、お腹がいっぱいになり満足げにげっぷをしました。同じ頃、ドゥルヴァーサと弟子らは川で沐浴を終え、祈りの儀式をしており、もうすぐパーンダヴァ兄弟らのもとに戻るところでした。しかし、神に祈りを捧げていると、皆、突然満腹感に襲われ、げっぷが出てきました。ドゥルヴァーサは言いました。「今戻ったら、何も食べられない。せっかく食事の支度をしたのに我らが食べないとなれば、あの剛力無双のビーマがさぞかし腹を立てることだろう。逃げるぞ！」

こうして主は、心の底から救いを求める信者らを窮地からお救いになったのです。

大切なこと

クリシュナの物語をいくつかお話しましたが、クリシュナが伝えたいのは三つのことです。まず、心や感覚の制御に努めなければならないということ。心も体も浄めるよう努めるのです。次に、何をすることも執着しないことで

す。誰に対しても自分の務めを果たし、働き、人間関係を築くのです。そうしながらも、無執着でいるのです。三つ目に、働いているとき、自分の務めを果たしているときに、「常に私を思いなさい。私につながっていなさい」ということです。これがカルマ・ヨーガです。

クリシュナは生涯を通じて、『バーガヴァタム』や『バガヴァッド・ギーター』でこの三つのことを伝え続けました。私たちも、純粹さ、無執着、働きの最中も神につながっているという素晴らしい性質を育み、靈性を高めましょう。



忘れられない物語

神様のことを思い出す

インドの聖者ナーラダは主ハリの信者でした。ナーラダは信仰心が篤いあまり、ある日、世界中で自分ほど神を愛している人間はいないと思い込むようになりました。

神はナーラダの心を読み、語りかけました。「ナーラダよ、ガンジス川の岸边にあるこの町に行きなさい。そこには私の信者の一人が住んでいる。この男と一緒に生活すればお前のためになるだろう」

ナーラダが行って見つけたのは、朝早く起きてただ一度ハリの名を唱え、それから鋤を手に取り畑に出て一日働く農夫でした。農夫は夜眠りにつく直前にハリの名をもう一度唱えました。ナーラダは思いました。「どうしてこんな田舎の農夫が神の信者であると言えるのか。私はこの男が一日中、世俗的な活動に没頭しているのを見たぞ」

その時、神はナーラダに言いました。「お椀の縁までミルクをいっぱいに入れて、町中を歩きなさい。そして、一滴もこぼさず戻ってきなさい」ナーラダは言われたようにしました。神が尋ねました。「町中を歩く間に、私のことを何回思い出したか答えよ」

「主よ、あなた様のことは一度も考えませんでした。命じられた通り、ミルクでいっぱいのお椀から一滴たりと

もこぼさないよう注意していたのですから、あなた様のことを思い出すなどどうやってできるというのですか」

神は言いました。「お前はお椀に気を取られるあまり、私のことをすっかり忘れていたのだね。しかし、あの農夫をごらん。家族を養う苦勞に明け暮れているにもかかわらず、私のことを日に二度も思い出しているではないか」

(アントニー・デ・メロ 『蛙の祈り』)

今月の思想

「経験から学べる者は、学びたいと思っている者だけである」

(オルダス・ハクスリー)

発行：日本ヴェーダータ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp